

茜色の歌姫



第六部 壬申の乱



壬申の乱（想像模型）

是^{すめらみこと}天皇、高市皇子に謂^{かた}りて曰^{のたま}はく、「其^それ近江朝には、左右大臣、及び智謀^{かしこ}き群臣、共に 議^{はかりごと}を定^なむ。今朕^{われ}、與^{とも}に事を計^{はか}る者無し。唯^い幼^{いとけなくわ}か、少^こき孺子^{こども}有^あるのみなり。奈^{いか}之何^{かに}かせむ」とのたまふ。皇子、（中略）奏言^もさく、「近江の群臣、多^{おほ}なりと雖^{いふ}も、何^なぞ敢^あえて天皇の靈^{みか}に逆^{さか}はむや。天皇独^{ひと}りのみましますと雖^{いふ}も、臣高市、神^{あまつかみ}、祇^{あまつかみ}の靈^{たま}に頼^より、天皇の命^{いのち}を請^まげて、諸

將を引率て征討たむ」(中略) 天皇誉めて、手を携り背を撫でて(中略) 鞍馬を賜ひて、悉に軍事を授けたまう。

(『日本書紀』卷第二十八)

第二章 朝庭の変事 672

近江京。

蒼く晴れ渡った天には雲ひとつなく、内裏へと通ずる大路の左右は、びしりと人垣で覆われ、そのなかを、唐使郭務悰とその一行が、前後を二百の唐兵に護られ、奏でる楽の音も賑やかに、ゆつくりと進んでいた。

内裏南門の扉が重い響きとともに開き、唐使一行を呑み込んでまた閉ざされ、唐兵どもは門前に散開し、内裏に背を向けて立ち並んだ。

ひとびとは囁きあつた。

——何故、筑紫にあつた唐使が近江に？

——倭媛皇后に、直に皇帝の国書を奉じたいとか。

——否、否。それだけではない。唐の皇帝は、共に新羅を討つよう求めてきた。されど倭媛皇后は諾したまぬ。故に、兵を率いて内裏に至り、威を以て皇后に、軍を興したまうよう、迫り奉るのである。

——では、皇后が諾さねば？

ひとびとは、凝然と内裏を囲んで屯する唐兵の、黒々とした甲冑や、陽に煌めく槍を、気味悪げに見つめた。

唐使郭務悰は、内裏の南門をくぐり、白い玉砂利を敷き詰めた朝庭に立った。

倭媛皇后は、朝庭に椅子をしつらえて坐している。その左右には、太政大臣大友皇子、左大臣

蘇我赤兄、右大臣中臣金、御史大夫巨勢比等、同じく御史大夫紀大人、蘇我果安。その他、王

族や官人が居並んでいた。

女の倭王か……。

唐人である郭務悰は、女に臣として拝礼することに慣れていない。幾分、心の裡にかすかな苦みを覚えつつも、如才なく、玉砂利に膝を突いて拝礼し、皇帝からの国書を開いて読み上げはじめた。

大友皇子は、やや俯き、その面差しは何えない。倭媛皇后は、常の穏やかな眼差しを、国書を読み上げる郭務悰に注いでいる。彼等の背には、屋根を赤く塗った内裏正殿が聳えていた。床を高くあげて組まれた正殿の、礎石に固められた柱の陰に、密かに人が隠れているのを、誰も気づかなかった。

額田郎女であった。

その二日前の夜。

密やかに人目を忍びつつ、額田郎女の邸を訪れたのは、蘇我赤兄であった。

蘇我赤兄は、かつては葛城皇子と策を共にし、豊日大王の失墜に手を貸し、有馬皇子をそそのかして謀叛を起こさせようとした。葛城皇子が鏡郎女とともに宝大王を弑殺した時も助力した。

やがて葛城皇子を見限り、豊璋王子を擁立して天皇の御位に即けた。

今や左大臣として近江の内裏に重きをなす赤兄が、何用あつての訪ないなりや。額田郎女は訝しく思いつつ、奥へと招じ入れた。

向かい合つて坐し、憔悴しきつた蘇我赤兄に、額田郎女は息を呑んだ。いまだ五十路を過ぎたばかりであるというのに、瓢箪のように長い貌には深い皺や染みが目立ち、心の裡を見せなかつた眠たげな眼は、落ちくぼんで生気を失っている。

「額田郎女よ……」

汝に頼みたきことあり。赤兄は、眼差しを床に落としたまま、かぼそい声で言った。

頼み？ 赤兄の意を掴みかね、強張つた面差しで黙する額田郎女を、赤兄は貌を上げ、すがるような眼差しで膝を進めた。

「大友皇子は、再び水軍を興し、新羅を討とうと意を決している」

「新羅を？」

「いま、新羅に兵を出せば、内裏の庫は尽きる。さらに……」

唐の意は、新羅を併呑すること。そうなれば、日本は海を挟んで、強大な唐と直に対峙することになる。

額田郎女は首を傾げた。そのことは、倭媛皇后が諾せず、蘇我赤兄の献策で、唐に兵器を献じることでは決したのではなかつたか。

蘇我赤兄は首を振った。

「大友皇子は、果安や中臣金、さらに百濟より来れる王や臣どもと、新羅出兵を果たすべく謀

を練っている。如何なる謀るか、吾は知らず、されど……」

やがて唐使が近江に至る。それまでに、大友皇子らは事を起こすに違いない。

「謀を阻むため、汝の助力が欲しい」

「吾は……」

額田郎女は静かに言った。

「ただの歌人故に……」

「汝が、かつて土蜘蛛として、蘇我鞍作を誅殺したことは、知っている」

赤兄は、まっすぐに郎女を見つめた。

「確かに吾は、汝や、汝が夫なる大海人皇子の敵であった。にわかには信じられずとも無理はない」

言うなり赤兄は、床に額をつけて叫んだ。

「乞う、汝の助力を」

「吾に何をせよと……」

「吉野宮におわす大海人皇子に、この事を報せよ」

赤兄は貌を上げた。

「唐使が近江に至る前、あるいは至りし時、必ず何かが興る。飛鳥留守司なる高坂王も、大友皇子と謀を共にするはず。必ず、吉野に兵を差し向けよう。疾う、いづくかへ落ちる備えを調えたまえ、と」

蘇我赤兄は、それだけを伝えて去った。

額田郎女は、しばし坐し、思いを巡らせた。赤兄が、郎女を欺いているとは思えなかった。

大友皇子らの動きを見張らせている土蜘蛛の鮎芽や、大海人皇子の舍人である置始比等からも、蘇我果安や中臣金、その他、百濟から来たった王族を中心とした大友皇子に組みする一派に対し、蘇我赤兄や紀大人らは劣勢にあると伝えられていた。

額田郎女は、彼等から大海人皇子に通じていると思われる。このころ、邸の周りを、誰ともつかぬ者が怪しげに徘徊していることが多い。その郎女を頼り、自ら足を運んで来るとは、蘇我赤兄が抜き差しならぬほど追い込まれているということか。

では、大友皇子らが練っている謀とは何か。

新羅出兵を果たそうとして、もつとも妨げとなるは倭媛皇后。まさか、大友皇子らが、皇后を弑殺せんと謀るだろうか……。否、弑殺までせずとも、天皇の御位を譲られれば……、そのためには……。

郎女の脳裡に、二十七年前の雨の降りしきる板蓋宮が浮かび上がった。あの折り、郎女は俳優に扮し、蘇我鞍作のふぐりを砕いた。混乱の中ですぐさま郎女が宮を去った後、葛城皇子は自ら鞍作にとどめを刺した。眼前で寵臣を誅された宝大王は、御位を譲りたもうた……。

そう、あの折りも、百濟の官人を迎えての宴の席であった。二日後、近江の内裏には唐使が……。

あと二日。五人の土蜘蛛のうち、近江にあるは鮎芽一人。土蜘蛛の長である繭環は、葉耶と共に箸墓にあつて飛鳥留守司を、結奈は難波で阿倍比羅夫の水軍を見張っている。いちばん年若な瀬利は常に近江、難波、箸墓の間を往還する役目。鏡郎女は、このころはその行方も定まらぬ。

まずは、鮎芽を疾う、吉野へ派さねばなるまい。派してしまえば、近江に残るは吾独り。何が出来ようか。

内裏朝廷での儀式は続いていた。

「皇帝、倭王を問う。朕、宝命を欽び承けて、区宇に臨仰ぐ。徳化を弘めて、含靈に及びこうむらしむることを思う……」

郭務悰の奏上を、訳語が日本の言葉に直した。遍く世界に唐の風を広め徳化することこそ、唐の皇帝の務めである。他国に与える国書の決まり文句であった。

居並ぶ豪族どもは、続いて発せられるであろう、唐が日本に求めるものは何か、に心を向けていた。朝議では、兵は派さず兵器のみを献じることと定まり、すでに唐使には伝えてあった。この度、唐から下された国書は、それを受けて書かれているはず。

即ち、派兵を拒んだことに、唐はどう応じてくるか。ひとびとは固唾を呑んだ。

唐兵に囲まれた内裏の外の人垣に混じって、置始宇佐伎は、民人の装りで、周囲を窺っていた。常と異なることがあれば、疾う、置始の家へと報せよ。額田郎女からは、そう命ぜられていた。

その後は、近江にある大海人皇子の血を引く三人——郎女の娘である十市皇女と三歳になるその子、胸形君の娘が生んだ十八歳の高市皇子を手引きし、吉野へと向かわせる。もし、事が起こり、いよいよ軍となれば、大友皇子らは彼等を捕らえて質とし、大海人皇子を嚇し、動きを封じようとすることに違いない。それだけは避けねばならぬ。

堅く閉ざされた門の裡は、塀の外にある者には伺えない。置始宇佐伎は、強張った面差しで、門に、塀に、人垣に、大路に、しきりと眼差しを移していた。

ふと宇佐伎は、大路を進んでくる百ほどの兵に気づいた。騎馬の兵長五人に率いられ、矛を構えて足早に進んでくる。人垣がざわめいた。

塀の外にあった唐兵は、不意に現れた日本の兵どもに、とくに驚いたふうも見せなかった。日本の兵どもは門前で足を止めた。馬上にあった兵長が、唐の兵長に歩み寄り、何事かを囁いた。唐の兵長は頷き、一声叫んだ。唐兵が数名、内裏の門を三度、小さく敲き鳴らした。

左大臣蘇我赤兄は、眼差しを伏せ、拳を握りしめていた。沸き上がる震えが止まらず、息が乱れるのを抑えられなかった。

「疾く軍を興し、新羅に派すべし」

唐使は、確かにそう読んだ。唐の皇帝は、確かにそう命じた。

何故……。唐使郭務悰および一行には、密



七世紀の官人と官女

かに人を派し、珍宝を献じ、派兵ではなく兵器を献じることですませるよう、頼んでいた。郭務
惊からは、唐の皇帝は倭媛皇后の意を蔑ろにはしない、との内諾も得ていた。然るに、皇帝の
国書は、唐に逆らう新羅を言を尽くして罵倒し、日本は唐に随い、新羅を討滅するだけの軍を
派せと、高々とした調子で命じている。

素早く、大友皇子に眼を走らせた。皇子は俯いたまま、面差しを変えていない。続いて蘇我果
安を見た。唇の端が緩み、勝ち誇った様。やはり……。彼等もまた、郭務惊と通じていたか。施
した謀はすべて覆された。してやられた……。

愚かな果安よ、汝は若い。白村江での大敗の後、吾等がどれだけ力を尽くし、被った痛手を
復せしめたか、汝等は知るまい。ここで軍を興せば莫大な費えが要る。先の三韓出兵の折りは、
勝てば百済を通じて鉄の利を得ることができた。この度は、たとえ勝つて新羅を滅ぼしても、利
を得るは唐のみ。新羅は今、長年の軍に疲弊している。談合を以て鉄の利を引き出すは容易い。
新羅を滅ぼすは、唐に益あつて、日本には、あるいは蘇我には寸毫の利もない。

果安よ——。赤兄は同族を呪った。汝は、百済を滅ぼした新羅を討ち、敗北の恥辱を雪ぐこと
しか考えていない大友皇子をはじめ百済人に唆され、先が見えなくなっている。

赤兄は、さがるように倭媛皇后を見た。大友皇子の策を阻むのは、もはや皇后しかいない。

皇后は、面差しを変えず、心の裡を見せぬまま、国書を読み終えて拝礼する郭務惊に小さく頷
いた。国書を受け取り、皇后に渡すのは、赤兄の務めである。

赤兄は立ち上がった。進み出て、郭務惊が両手で押し頂く国書を、膝をついて受け取った。そ
のまま踵を返し、皇后のほうに向き直ったとき、背後で内裏の南門が開く音が響いた。

儀式の最中に何事……。

振り向いた赤兄の眼に、刃が煌めいた。肩に、足に、腹に、焼け付くような痛みが走り、血飛
沫が上がった。その血飛沫が己が身から上がっていると知ったとき、赤兄は、すべての終わりを
悟った。

居並んだ豪族どもは、二人の刺客が抜剣して蘇我赤兄に飛びかかり、その四肢を斬り刻むのを、
呆然と見つめていた。たちまち玉砂利が赤く染まった。

蒼惶と立ち上がった豪族どもを、「鎮まれ！」と制したのは大友皇子であった。

「皇后よ……！」

残る力を振り絞り、蘇我赤兄は刺客たちを振り払い、皇后の御前までよろばい、裳裾を掴んで
倒れた。

「何とぞ……！」

俯せに倒れつつ、辛うじて貌を上げて何かを訴えようとする赤兄の背後に、大友皇子が膝を突
いた。

「蘇我左大臣は、唐の皇帝の意に逆らい、新羅と通じ、さらに吉野にある大海人皇子と通じ、共
に謀って日本を傾けんとす。故に討った」

蘇我赤兄は、焼け付くような痛み痺れる身をやつと振り、首を曲げて、背後を見た。傲然と
皇后に向かつて叫び続ける大友皇子の後ろに、郭務惊をはじめ唐使一行が、さして驚いたふうも
なく立っている。

やはり……。唐を後ろ盾としての謀なるか。
さしもの吾も、見抜けなかった。かくも愚かな皇子であったとは……。

如何する……。

内裏正殿の床下に潜む額田郎女は齒嚙みした。

まさか唐使の前で、左大臣を誅殺するとは思っても寄らなかった。

同じだ。かつて、葛城皇子が宝大王の御前で蘇我鞍作を誅したのと……。

赤兄は、皇后の裾にすがった状態で、身の動きを止めた。流れ出た血の夥しさから、命を持ちこたえるとは思えなかった。血に穢れた皇后。かつて宝大王が豊日大王に御位を譲ったように、血に穢れた皇后が、称制を続けるわけにはゆくまい。

「屍を外へ！」

いつしか、内裏南門から百余の兵が、朝廷に集まっていた。四人の兵が、赤兄の屍を板に乗せ、南門の外へと運び出した。残る兵どもは、息を呑む豪族どもを威圧するように矛を構えて立ち並んでいる。

「唐使の方々よ」

大友皇子は叫んだ。

「皇帝よりの国書を頂く儀式を、血で穢したは、吾等が罪。この罪は、皇帝の意を仰ぎ奉り、疾く兵を調べ、新羅へ派すること、贖うは如何」

「好」

郭務は笑みを浮かべて頷き、倭媛皇后に拝礼して立ち上がり、踵を返した。ゆつくりと南門へと歩み、内裏の外へと去った。再び門は閉じられた。

「皇后よ、裳裾が……」

大友皇子は皇后の前に拝跪して言った。皇后の裾は、すがり付いていた赤兄の血に塗れていた。

「疾う、穢れを浄めたまえ」

皇后は凝つと大友皇子を見詰めていた。瞬きもせず、動かぬ瞳から眼を逸らし、大友皇子は続けた。

「左大臣に組みする者、いまだ多し。しばし近江京にある皇族の方々を内裏に集わせ、吾が兵にて守護し奉らん。如何？」

「否、と言えば……」

皇后は静かに口を開いた。

「汝は、吾をも弑するか」

皇族をすべて内裏に押し込め、政事を思うままにしようとする大友皇子の意は明らかであった。

「皇后よ」

大友皇子は、唇の端をゆがめて笑んだ。

「疾う、寝殿にて穢れを浄めさせたまえ」

「皇子よ」

皇后は眼を臥せ、悲しげに呟いた。

「人の信を得られぬ者が、徒（いたずら）に策を弄せば、必ず滅ぶ」
そのまま立ち上がり、大友皇子に背を向け寝殿に向かう皇后を、大友皇子に促された十幾の兵どもが追った。

「人々よ！」

右大臣、中臣金が叫んだ。左大臣蘇我赤兄亡き今、豪族の最上位にあるは、金であった。

「皇后は、朝庭を逆臣の血で穢され、御心を悩ましたまう。政事を司らせ奉るは、恐れおおきこと。しばし、大友皇子が代わって称制したまうべし」

応。御史大夫の巨勢比等が和した。

「よき策である」

百濟より来たった王や臣もまた、口々に「応」「諾」とわめいた。御史大夫の蘇我果安が、震えながら黙っていた同役の紀大人に何事か囁いた。赤兄に与していた紀大人は、貌を蒼白にして立ち上がり、うわごとのように叫んだ。

「吾も、大友皇子の称制したまうことを希う」

これまで蘇我赤兄に組してきた豪族どもも、随うしかなかった。みな、大友皇子の御前に膝を進めて拝礼した。

「諾！」

大友皇子は、大きく頷いた。

「さらば人々よ、近江にある皇族の方々を、ことごとく内裏へと迎え奉れ！」

朝庭に屯する兵どものうち十数が、いつせいに南門へと駆けた。門が開かれ、その外で馬蹄が

響いた。

——十市皇女や、高市皇子を捕らえるのか……。

正殿の床下で一部始終を見守ってきた額田郎女は、齒噛みした。

何もできなかった。蘇我赤兄は誅殺され、倭媛皇后は押し込められた。さらに十市皇女らを質とされてはならぬ。

郎女は、すばやく動き出した。

内裏の外は、ひとびとの喧騒と、兵馬のざわめきに満ちていた。口々にわめきあう人々が、馬蹄のとどろきに驚いて道を開け、砂塵を巻き上げて騎馬の兵が駆け過ぎる。

人波を掻き分け掻き分け、額田郎女は十市皇女の住まう宮へと向かった。

三年前、父の分からぬ子を生んでより、十市皇女は大友皇子の宮より遠ざけられ、わずかな女孀や舍人とともに、近江京のはずれ、小さな仮宮に住んでいた。置始比等が、十数の伴部を潜ませていたが、大友皇子はすでに兵を差し向けているであろう。

まずは、十市皇女のもとへ……。

人々の間をすり抜け、額田郎女は急いだ。

「額田郎女！」

人垣の裡より、声がした。見れば、置始宇佐伎であった。

「宇佐伎よ！」

郎女は駆け寄り、宇佐伎の両腕を掴んだ。

「十市皇女と高市皇子は如何？」

「高市皇子は、ぶじ、近江を出でて、吉野へと向かいたもうた。されど……」

「十市は！」

眼を見開いて叫ぶ郎女に、宇佐伎は眼を臥せた。

「間に合いたまわず、百を越す兵に宮を囲まれ……」

「捕らえられたか！」

「否、吾が伴部によれば、いまだ抗い続けているとはいえ、皇女を守り奉るはわずか二十余……」

郎女の四肢が震えた。

「守らねば……。どうあつても、十市皇女を守らねばならない。」

躊躇ためらいは赦ゆるされない。

「宇佐伎よ」

郎女は叫んだ。

「吾は、十市皇女の宮へ行く。もし、皇女がすでに捕らえられていれば、吾もともに、内裏に潜む。たとえ、皇女が大友皇子の質となるとも、必ず吾が守る。ゆえに心置きなく軍いくさをせよと、大海人皇子に伝えよ。さらに、箸墓にある繭環まゆわを訪ない、土蜘蛛を一人、近江へ派すよう頼め」

「諾！」

駆け出した置始宇佐伎の背を見送り、額田郎女は十市皇女の宮へと向かった。

十市皇女の仮宮の門は破られ、百余の兵が雪崩なだれ込んだ。舍人や置始の伴部どもの抗いもむな

しく、庭にも屋にも、そこかしこに屍が転がり、激しい剣戟の音が響いていた。

額田郎女が、十市皇女の寢屋に忍び入ったとき、すでに皇女の姿はなく、三人の女孀が、血に塗れて転がっていた。

間に合わなかったか。しかも、女孀どもまで……。郎女は唇を噛み締めた。

ふと、呻きが聞こえた。見れば、一人の女孀が身を起こしていた。血の滴したたる左の腕を押さえ、眼をつぶって呻いていた。こちらに貌を向け、眼を見開いた。

「額田郎女……」

見知った女孀であった。郎女は彼女を制し、すりよって赤く染まった袖をめくりつた。さいわい、傷は浅い。郎女はすばやく己が袖を裂いて傷に巻きつつ、問うた。

「皇女は？」

「すでに……」

女孀は眼を潤ませ、俯いた。郎女は、その肩に手を乗せて慰撫しつつ、さらに問うた。

「女孀は、ことごとく斬られたか」

「否、幾人かは、皇女とともに捕らえられた」

郎女は頷き、女孀を促して立ち上がった。

「走れるか」

頷く女孀に、郎女は続けた。

「さらば汝が衣を吾に。汝は吾が衣を着よ」

兵の手薄な箇所をすり抜けて女孀を逃がし、郎女は再び宮の裡に戻った。物陰に潜み、短剣を抜いた。

内裏に忍び入るは易いが、夥しい兵が厳しく見張っているであろうなかを、十市とその子随って抜け出すは難い。軍が終わるまで、皇女の傍らにあって決して離れまい。他に策はない。まず女孀の衣を纏い、皇女への随行を申し出る。うまくいけば、ともに内裏へ随れゆかれるであろう。

しかし、内裏には郎女の貌を知る者は多い。彼等に見破られぬためには……。

額田郎女は、短剣の刃を頬に当てた。総身が縮んだ。胸が鼓動を打った。

躊躇うな……。

皇女を守るため。

右の頬から、鼻梁をかすめて左の額へ、郎女は一気に剣で己が貌を切り裂いた。

すでに、仮宮を守っていた舎人や置始の伴部はことごとく討たれていた。斬を免れた女孀どもは、後ろ手に縄を打たれ、門前に並んでいる。

十市皇女は、四人の兵の担ぐ板輿に乗せられ、惚けたように坐していた。裳裾に隠れた足首を縛られて。その後ろに、やはり板輿に乗せられた三歳の皇子……十市皇女が産んだ葛野皇子が、年かさの女孀に抱かれて、不安げに周りを見回していた。

「皇女よ！」

門から女孀が一人、よろばい出た。

兵どもが、いっせいに門を見た。貌を血まみれの布で覆った女孀が、地に坐している。

「乞う、皇女と共に随れゆかれよ。吾を、皇女の側近くに侍らしめよ！」

その声に、板輿の上でうなだれていた十市皇女が貌をあげた。眼が見開かれ、面差しが細かく震えていた。貌を覆った女孀はさらに叫んだ。

「誰か！」

兵を率いる馬上の兵長が怒鳴った。女孀は、さらに声を張り上げた。

「乞う！ なにとぞ、共に随れゆかれよ！」

「兵長！」

十市皇女が叫んだ。

「その女孀を伴え。伴わねば、吾は舌を嚙んで死ぬぞ！」

内裏の寢殿、倭媛皇后の寢屋は、うなだれた女どもで満ちていた。

皇后と並んで、十市皇女には椅子を与えられた。十人ばかりの女孀どもは、冷たい床に坐して黙し、時に目をかわし、恐ろしさを堪えている。

寢屋の外は、矛を構えた兵どもが居並び、出入りは厳しく戒められていた。

「皇女よ」

倭媛皇后が、十市皇女に語りかけた。

「吾が力及ばず、皇女にも辛い思いをさせる」

「否」

十市皇女は首を振った。

「近江に來たりてより、獄ごくに繋つがれる思いを味わいつづけてきた。それに……」

皇女の向けた眼差しの先に、血に染まった布を貌かほに巻き付け、唇くちびるばかりを出した女孀むすめがいた。皇后が問うた。

「あの女孀は、貌を斬られたのか？」

十市皇女は眼差しを臥ふせ、悲しげに微笑んだ。悲しげなようでもあり、嬉しげなようでもあった。

しばし首を傾かげて、皇女と女孀を見つめた皇后は、ふと立ち上がり、外の兵を呼んだ。兵が一人、寢屋ねやに入いって拝跪はいきした。

「医人をこれへ」

訝あやしげに貌を上げた兵に、皇后は重ねて命じた。

「傷の手当てをせねばならぬ者がいる。疾とう呼よべ」

兵はやや躊躇ちゅうちゆい、寢屋を出ていった。

「皇后よ」

不意に、貌に布を巻いた女孀が口を開いた。

「その医人の名は？」

聞き覚えのあるその声に、皇后は眼を見張った。

額田郎女……。その名を呼ぼうとして、皇后は口を嚙くみ、十市皇女を見やった。皇女の眼が潤み、微笑んだ唇がかすかに震えていた。

皇后は問うた。

「汝は……皇女のために、自ら、己が貌を……？」

「然り」

その応えに、十市皇女は双の手で貌を覆い、激しく肩を揺らせ、声を潜めて嗚咽おえつした。皇后は、こみあげる思いに喉を詰つまらせつつ、囁ささいた。

「心安んじよ。五日前に近江に來たつた高句麗の医人、汝の貌は知らぬはず」

女孀……額田郎女は頷うなづいた。

傷の癒えるまで一月はかかろう。それまで布で貌を覆ってればよい。その頃には、軍も終わるだろう。たとえ終わらぬまま傷が癒えても、深々と三筋、刃で抉えぐった貌は、もとの形を保つてはいまい。誰にも額田郎女と気づかれることなく、皇后と皇女を守ることができる。

ふと、小さな眼差しに気づいた。三歳の葛野皇子が、年かきの女孀の袖にすがり、こわごとと郎女を見つめていた。

吾が孫……。

気づけば、吾もはや孀おきな。十市によく似ている。そして……あの津軽で皇女と睦なんだ蝦夷の男童にも。十市がまぐわった名も知らぬ男は、やはりあの津軽の男童に似ていたのであるのか……。

内裏の朝廷は、兵を随まれて参集した豪族どもに埋め尽くされていた。

「穂積百足！」

大友皇子は、一人の豪族の名を呼んだ。進み出て拝跪した穂積百足に、皇子は命じた。

「疾う飛鳥へ赴き、留守司の高坂王たかさかのきみに伝えよ。吉野にある大海人皇子並びにその一族、ことごとく飛鳥へ迎え、押し込め奉れ。もし抗えは……」

「抗いたまえば？」

髭面の百足の問いに、大友皇子は短く応えた。

「弑しいし奉れ」

さらに付け加えた。

「躊躇ちよちような」